

【京都新聞】

(H26.6.23)

# 若年性認知症 就労広がる



65歳未満で発症する若年性認知症の患者の就労支援に取り組む守山市のNPO法人の活動が県内外で広がりを見せており、愛知県と長野県の医療施設などでは今夏から、守山で受注した仕事を分担することになり、職員らがこのほど研修のため同市を訪問。「できる限り働きたい」という患者の思いを熱心に聞いていた。

## 守山のNPO受注 県外に分担

NPO法人「もの忘れカフェの仲間たち」によると、若年性認知症の初期では退職を余儀なくされた人でも就労意欲の高いケースが多い。彼らのニーズに応える居場所づくりが全国的な課題になつている。

守山市では2011年、NPO法人の母体となる藤本クリニックの一室で、患者3人が参加し始めた。現在は患者が12人に増え、介護家族やボランティアらと週1回約4時間、自動車部品の仕分け

など3種類の軽作業を行つている。

就労支援を始めようと模索していた愛知県一宮市のいまいせ心療センターと、長野県上田市の宅老所もくれんが、守山での活動を学会発表や書籍で知り、同法人に連絡。全国の医療機関で認知症患者に配られる資料の袋詰め作業を3万部と大量に受注しており、3万台で分担することにした。

研修に訪れた両施設の職員計6人は、症状に配慮した作業手順を確認し、患者に仕事への思いを尋ねた。8月スタートを目指すもくれん施設の有賀祐子さん(39)は「認知症の人たちが生き生きと働く姿に勇気をもらつた。しっかりと準備したい」と話した。

県内では高島市のNPO法人が、若年の認知症や脳卒中の人们が集う場を今秋に開設する準備を進めている。

（芦田恭彌）  
就労支援の担当者右端に資料の袋詰め作業の注意点を聞く愛知県と長野県の医療介護職員  
(守山市梅田町)

## 「働きたい」意欲高く

（芦田恭彌）

【京都新聞】

(H26.10.12)

65歳未満で発症する若年性認知症や、軽度の認知症を対象にした就労支援の拠点が、10～11月に滋賀県内の3カ所で相次いで発足する。各拠点の関係者がこのほど連絡会「しが仕事の場ネット」を立ち上げ、協力して就労意欲の高い患者に働く場を提供する。

拠点となるのは、大津市のNPO法人「ハート・イン・ハンドチャリティー」、長浜市の「デイサービスとよしま」、高島市のNPO法人「元気な仲間」。県内で唯一、就労支援活動をしてきた守山市のNPO法人「もの忘れカフェの仲間たち」が呼び掛けた。

若年性や軽度の認知症は

介護保険サービスの利用まで至らないため、患者が社会とのつながりや生きがいを感じられる活動の場をいかにつくるかが課題になつてきている。「もの忘れカフェの仲間たち」では、企業から内職を受注し、週1回の若年性認知症患者らの製作業に取り組んでおり、新たに3団体でも同様の就労支

援を始める予定だ。守山市でこのほど行われた同ネットの初会議で、それぞれの準備状況を報告。就労支援のあり方として、症状の進行を見極め、無理に仕事を続けずに本人の納得を得ながら適切な時期にデイサービスなどに移行する必要性を確認した。

事務局を務める看護師の奥村典子さんは、「若年の患者は『働きたい』という意欲が強い。4団体で情報共有し、認知症ケアのスキルアップを図りたい」と話した。

(芦田恭彦)

# 若年認知症、新たに3拠点

## 大津、長浜、高島に働く場提供

接を始める予定だ。

守山市でこのほど行われた同ネットの初会議で、それ

の準備状況を報告。就労支援のあり方として、

症状の進行を見極め、無理に仕事を続けずに本人の納得を得ながら適切な時期に

デイサービスなどに移行する必要性を確認した。

事務局を務める看護師の奥村典子さんは、「若年の患

者は『働きたい』という意

欲が強い。4団体で情報共

有し、認知症ケアのスキルアップを図りたい」と話した。

【京都新聞】

(H27.1.5)



「仕事の場」で参加者が取り組む自動車加工部品の仕分け作業  
(守山市梅田町・藤本クリニック)

若年性認知症患者が軽作業に取り組む就労支援の拠点「仕事の場」(守山市梅田町)に、高齢の軽度認知症患者など適切な受け皿のない人たちも参加するようになり、支援対象が広がりを見せている。運営するNPO法人は「福祉サービスの隙間に取り残された人たちの居場所やケアの場になれば」と話す。

### 守山・NPO運営「仕事の場」

## 制度の隙間埋める場に

「仕事の場」は、65歳というニーズに応えよう始まった。同クリニック未満で発症する若年性認知症患者の「働きたい」クリニックの1室で、「もの忘れカフェの仲間たち」が運営。週1回、企業から受注した自動車部品の仕分けなどの作業に取り組んでいる。

(森山敦子)

## 軽度認知症患者らも支援 若年性から対象広がり

一方、介護保険サービスを利用するまでには至らない軽度の認知症患者は、診断後すぐに適切なケアを受けられる場がないことが課題となっている。そこで、一昨年春から「仕事の場」への受け入れを開始した。現在は若年性13人と軽度3人が通っており、昨年11月から参加している70代の軽度の男性は「週1回楽しく仕事できるのはありがたい」と喜ぶ。

さらに最近は、精神障害の人や、学校や社会に適応しづらい若者も少しずつ受け入れている。認知症患者が若者に仕事をアドバイスをする場面もみられる。同クリニックの藤本直規院長は「さまざまな人が一緒に働くことで、より社会とのつながりを実感してもらえる」と話している。

【MEDIFAX】

(H27.1.26)

## かかりつけ医との連携で成果も 滋賀で若年認知症フォーラム

2015年1月26日 16:46



全国若年認知症フォーラム IN 滋賀で挨拶する三日月・滋賀県知事＝25日、滋賀県大津市内

全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会が主催し、エーザイなどが共催する「第6回全国若年認知症フォーラム IN 滋賀」が25日、大津市内で開催された。同フォーラムは2010年から毎年開催され、今回は若年認知症のケアや支援ネットワークが国内で最も進んでいるとされる滋賀県で開かれたこともあり、同県の三日月大造知事をはじめ約400人の関係者や一般市民らが参加した。

同日は厚生労働省老健局高齢者支援課認知症・虐待防止対策推進室の翁川純尚室長補佐（若年認知症対策専門官）による講演のほか、日本医科大学の北村伸特任教授の特別講演があった。

翁川氏は、若年認知症施策に関する都道府県の取り組み状況を報告する中で「調査資料から個人的にランキングした結果だが、施策は滋賀県が最も進んでおり、都道府県間の落差が大きいのが現状」と述べた。

北村氏は、神奈川県川崎市で日本医科大学が07年12月から始めた「街ぐるみ認知症相談センター」による相談活動を報告。これまで8年間で相談来訪者5976人、かかりつけ医への情報提供1866件などの実績を紹介し、若年認知症を含めた認知症、MCI（軽度認知障害）の早期発見に一定の成果を挙げていることを示した。10年度からは川崎市と日本医科大学の間で連携事業を開始したことも説明し、街づくりの一環として認知症支援体制を形成する必要性に理解を求めた。

診療所の立場から滋賀県の若年認知症対策をリードしてきた藤本クリニックの藤本直規院長を進行役にシンポジウムも企画され、「働くことへのチャレンジ」をテーマにケース報告が行われた。物忘れカフェやワーキングデイケアなど「簡単な作業労働」を提供する各種施設や関係団体の取り組み、特に地域の理解を得るために行う準備や支援体制、効果などについて、同県のほか愛知、長野両県の実施担当者から報告があった。特に滋賀県ではこうした取り組みに地域医師会が積極的に参画し、かかりつけ医の存在意義について地域で認識を拡大させることにつながっている状況も示された。

7回目となる来年の同フォーラムは、16年2月14日に熊本県荒尾市で開催される。

## 【中日新聞（滋賀）】

(H27.1.27)

**若年認知症に理解を**

大津で全国フォーラム

六十五歳未満の人が発症する「若年認知症」について考える全国フォーラムが二十五日、大津市のピアザ淡海であった。先進的な取り組みや課題が報告され、四百人以上の来場者が社会全体で理解する大切さを確認した。

若年認知症者は全国に三万七千八百人、県内に四百三十人いると推計される。フォーラムでは、日本医大武藏小杉病院（川崎市）認知症センター部長の北村伸医師が「仕事を続けられなくなり七割以上が発症後に減収した」「（世話のため家族が退職、休学していると紹介した。

日、大津市のピアザ淡海であつた。先進的な取り組みや課題が報告され、四百人以上の来場者が社会全体で理解する大切さを確認した。

若年認知症者は全国に三万七千八百人、県内に四百三十人いると推計される。フォーラムは全国若年認知症対策は最も進んでいると厚生労働省の担当者が紹介した。守山市の藤本クリニックが代表例で、藤本直規医師は企業から仕事を受注し、患者に働く場を週一度提供している取り組みを報告した。県の担当者は、「冊子を作つて理解を努めたり、コールセンターを設けたりしていると紹介した。

その中でも滋賀の若年認知症対策は最も進んでいると厚生労働省の担当者が紹介した。守山市の藤本クリニックが代表例で、藤本直規医師は企業から仕事を受注し、患者に働く場を週一度提供している取り組みを報告した。県の担当者は、「冊子を作つて理解を努めたり、コールセンターを設けたりしていると紹介した。

滋賀の取り組みを話す藤本医師＝大津市のピアザ淡海で



## 【中日新聞（滋賀）】

(H27.2.11)

**若年認知症支援に750万円**

**滋賀県予算案、福祉に力点**

滋賀県は十日、福祉や教育に力点を置いた二〇一五年度当初予算案を発表した。使い道を特定分野に限らない一般会計の総額は前年度当初比4・5%増の五千三百八十六億円。社会問題化しつつある若年認知症患者支援事業として七百五十万円を盛り込んだ。十七日に始まる県議会で月定例会議に提案する。

●面  
若年認知症患者支援で

滋賀県は、一部地域で実施してきたケアモデル事業を拡充。県内七つの医療圏域の介護事業所や社会福祉法人に授業施設のような軽作業ができる拠点を設ける。相談に応じられるようにもし、仲間と交流するなどして生きがいを持つもらうことを狙いつつ、教育費については前年度当初比2・9%増の千三百六十二億円とし、小学校全学年での三十五人学級の実現、土曜学習支援などの新規事業を打ち出す。特別会計企業会計を合わせた二〇一九年調査で患者が全国に三万七千人、滋賀県に四百三十人いると推計され、一千九百三十六億円。

(H27.2.25)

ようやく県内外に広がり始めたと感  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

——新オレンジプラン公表（1月27  
日）に合わせたように専門家が  
集まつた「全国若年認知症フォ  
ーラム in 滋賀」（同25日）は  
大盛況でした。

参加希望者が多すぎて、多くの方  
をお断りしました。1990年、滋  
賀県立成人病センターに、「一般病院  
で初めて「もの忘れ外来」をつく  
って四半世紀。私たちの取り組みが  
ようやく県内外に広がり始めたと感  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

——専門外来のきつかけは？  
——認知症に医療としてどう向き合え  
ばいいのか、当時はあまり分かって  
いませんでした。診断後も介護力の  
乏しさから患者さんは退院できず、  
社会的入院を続けざるをえませ  
ました。それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

——試行錯誤のあと「もの忘れクリ  
ーク」として独立した。

——患者の声に向き合った結果、自  
然に「もの忘れカフェ」や「仕  
事の場」ができあがつた。「新  
オレンジプラン」にも同様の支  
援策が列挙されていますね。

それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

——「もの忘れカフェ」や「仕  
事の場」ができあがつた。「新  
オレンジプラン」にも同様の支  
援策が列挙されていますね。

それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

1月に公表された「新オレンジプラン」＝  
（1年開設）は認  
知症対策を国家的課題に位置づけた。全国一とされる滋賀  
県の若年認知症施策。その中心となつた藤本直規医師（62）  
に困難さについて聞いた。  
【聞き手・滝野隆浩（写真）】

（1年開設）につながつた。

——それが軽度の人の「仕事の場」  
（1年開設）につながつた。  
——専門外来のきつかけは？  
——認知症に医療としてどう向き合え  
ばいいのか、当時はあまり分かって  
いませんでした。診断後も介護力の  
乏しさから患者さんは退院できず、  
社会的入院を続けざるをえませ  
ました。それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

——試行錯誤のあと「もの忘れクリ  
ーク」として独立した。

——患者の声に向き合った結果、自  
然に「もの忘れカフェ」や「仕  
事の場」ができあがつた。「新  
オレンジプラン」にも同様の支  
援策が列挙されていますね。

それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

——「もの忘れカフェ」や「仕  
事の場」ができあがつた。「新  
オレンジプラン」にも同様の支  
援策が列挙されていますね。

それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

それが99年。すると今度は、高齢  
なじた。病室に行くたびに家族が  
「ご迷惑をおかけして……」と何度も  
頭を下げるのです。そんなケース  
が後をたちませんでした。急性期治  
療を中心とした医療では、認知症は  
対応できません。そこで専門窓口  
をつくり、診断だけでなく、そのあ  
との家族支援までやりたい。やり  
始めたら、患者やご家族から教え  
もらうことばかりでした。

## そこが聞きたい [若年認知症支援の視点]

【インタビュー】 藤本 直規氏  
藤本クリニック院長



ふじもと・なおき  
京都大卒。滋賀県立の病院に  
事務外来を開設。その後、守山  
市にクリニックを開いた。認知  
症の医療とケアなど蓄積多数。  
それでも彼らは社会とつながりたい

めます。買い物に行ぐ、バザーを行  
る、清掃するなら駄がいいねなど  
と。しかし「病気になつたことは  
つらいけど、ここで仲間ができた」  
と少し前向きになつていきました  
。高齢の認知症と同じですが、若  
年の方は病気であることを理解して  
もらえて、周囲の負担も大きい。そ  
れでも彼らは社会とつながりたいと  
訴え続けました。

### 1 新オレンジプラン

団塊の世代が75歳以上となる  
2025年には、認知症の人は700万人、  
高齢者の約5人に1人になると推計されたことを受け、政府は  
1月末、新オレンジプラン（認知  
症施策推進総合戦略）を策定した。  
「認知症の人の意思が尊重され、  
できる限り住み慣れた地域のよい  
環境で自分らしく暮らし続ける社  
会」を目指すといい、政府を挙げて  
取り組む体制となった。

### 2 若年認知症

65歳未満で発症する認知症。高  
齢者の認知症と病理学的な差異は  
ないとされるが、本人が受診をためらうケースが多く、早期発見は  
難しいという。また、働き盛りの  
世代のため、働くことが困難にな  
った場合の本人の精神的な苦しさ  
に加え、家族の経済的負担なども  
重なってくるといわれている。

【滋賀報知新聞】

(H27.2.27)



県は、若年認知症の支援強化に向けた総合支援事業（七百五十万円）を盛り込んだ新年度予算案を開会中の県議会へ提出している。

## 若年認知症への総合支援

# 心合支援 者・家族サポート

これらの事業を実施することで、従来からの△本人・家族への力△セイリング△企業研修・啓発△認知コールセンター△ケアにかかる人材育成とあわせて発症初期段階から切れ目のない支援を行う。

【産経新聞（滋賀）】

(H27.3.3)

## 若年認知症 進む取り組み

### 認知症患者の主な特徴

- ・物忘れが激しい
- ・判断力や理解力が衰える
- ・待ち合わせの時間や場所が分からなくなる
- ・人柄が変わる
- ・不安感が強い
- ・物事に対する意欲がなくなる

若年認知症の症状は、物事を覚えられない「記憶障害」▽スマートに物の名前が出てこない「失語」など、病理学的には高齢者の認知症と同じ。しかし、働き盛りの世代が突如として発症するため、患者の就労状況や家族の生活環境に深刻な影響を及ぼす。早期に発見できれば、適切な治療を受け、症状の進行を遅らせることができる。だが、あまり知られておらず、中には若年認知症だと分からぬまま、周囲に「急け者」と思われ、鬱病を併発するケースもある。



若年認知症への理解を深めるため県が開いた企業研修

### 県、新年度はサポート事業

65歳未満で発症する「若年認知症」に対する理解を社会全体で深めようと、県が取り組みを進めている。周知が進んでいないことから、発症者の医療機関への受診が遅れ、周囲の協力も得にくく、症状が深刻になりがち。県は、「これまでに相談窓口を設けたり、企業などに出向いて研修会を開いたりしており、新年度は若年認知症と診断された場合のサポート事業を計画している。

手がけ、症状に対する理解を求めている。また、発症者に対するケアとして、患者同士の交流会や内職などの就労支援も実施している。

これらの努力で徐々に知られるようになり、平成21年度

で47件だったコールセンター

への相談件数は、25年度で1

34件、26年度も1月末時点

で135件とすでに前年度1

年間を上回った。こうした状

況を受け、今年1月25日に大

津市内で開かれた「全国若年

認知症フォーラムIN滋賀」

では、厚生労働省の担当官が

「若年認知症に対する支援

は、滋賀県の取り組みが全国

で「一番進んでいる」と評価し

た。

さるに、新年度は若年認知

症

と診断された人やその家族

に対し、医師が今後のライフ

プランについてアドバイスす

る事業を計画。これを含めた

関連事業費として、一般会計

で「一番進んでいる」と評価し

た。

県医療福祉推進課による  
と、全国の若年認知症の推計  
患者数は約3万8千人。人口

比率から、県内では430人  
程度が発症しているとみられ  
る。

さるに、新年度は若年認知

症と診断された人やその家族

に対し、医師が今後のライフ

プランについてアドバイスす

る事業を計画。これを含めた

関連事業費として、一般会計

で「一番進んでいる」と評価し

た。

さるに、新年度は若年認知

症と診断された人やその家族

に対し、医師が今後のライフ

プランについてアドバイスす

る事業を計画。これを含めた

関連事業費として、一般会計

で「一番進んでいる」と評

## 第6回 全国若年認知症フォーラム IN 滋賀

2015年1月25日(日)  
ピアザ淡海にて開催されました!

主催・全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会  
共催・エーザイ株式会社・もの忘れサポートセンターしが／若年認知症コール  
センター（藤本クリニック）、NPO法人もの忘れカフエの仲間たち

◆かかりつけ医が行う  
若年認知症企業研修  
サポート医 藤井内科  
藤井 義正氏

◆行政もバックアップ  
守山市地域包括支援センター  
高島市南部・北部地域包括支援  
センター

◆家族も社会参加  
家族 藤本 寿雄氏

◆仕事の場のひろがり  
チームほたる  
立入 道夫氏  
仕事にきやんせ

NPO法人元気な仲間  
上野 康子氏  
谷 仙一郎氏

◆仕事の場のひろがり  
滋賀県から全国へ  
長野県NPO法人やじろべー

◆働くことでつながった仲間  
中澤 純一氏

愛知県社会医療法人杏嶺会  
いまいせ診療センター「認知症センター」  
小倉 紫氏

NPO法人滋賀県社会就労事業  
振興センター  
城 貴志氏



全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会宮永会長の開会挨拶、全国から集まった参加者は383名



川崎市における認知症の現状について、日本大學生特任教授日比伸先生のご講演



(構成上、レイアウトを改変している)



若年認知症対策の現状  
厚生労働省翁川純尚氏の報告

では働き盛りの世代の方々が発症することからご家族への影響がとても大きいと言えます。新オレンジプランでは重要な課題として位置づけられ、様々な施策が盛り込まれようとしています。

今回のフォーラムでは、厚生労働省老健局認知症・虐待防止対策推進室の翁川室長補佐より「若年認知症施策の現状」についてご報告をいただきました。特別講演では日本医科大学の北村特任教授が「川崎市における認知症連携と若年性認知症の現状」について、医療だけではなくまちづくりの視点で取り組む認知症対策のお話を聞かせてくださいました。そして滋賀県からは、県医療福祉推進課の山元課長より「滋賀県の若年認知症対策について」ご報告をいただきましたが、藤本クリニックの藤本先生と奥村看護師を中心とする滋賀

若年認知症については、認知症の診断を受けてから介護保険に至るまでのつなぎ目が必要です。若年認知症の診断を受けて仕事場を去った働き盛りの方々の姿がそこにはあります。藤本クリニックの3人の患者さんの声を聞いたことが「働く場を作れる」きっかけだったそうですが、当時は医療制度、介護保険制度などの従来の枠では支えられないと現実がありました。今、若年認知症の方々の仕事の場が県内外に広がりつつあります。若年認知症の方々だけでなく、障がいのある方も共に働くこの「仕事の場」は病気を受け入れ、地域ともつながり、そして介護保険へ移行する大切な場であることを知ることができました。

**参考** その他、本事業のスタートにあたって評価されたこれまでの取り組みや、本事業と並行的に実施されている地域医師会主導の多職種連携の会なども、メディアに取り上げられた。

【福祉ネットワーク通信（生活協同組合コープしが）】（H25.7.15）

## 特集

# 若年認知症

### その名も「ちょっと気晴らし伸び伸びの会」

医療法人「藤本クリニック」では平成2011年10月から、若年認知症で細かな手作業ができ、介護保険サービスの利用はまだされていない方3人と共に「仕事を始められました。内職仕事をさせてくださる会社とめぐり合うことができ、現在は10名ほどの方がその仕事を継続しておられます。

この「ちょっと気晴らし伸び伸び会」さんを見学したいという私の申し入れにOKをしてくださった藤本先生から「見学というよりも一緒に作業をしてみてね。」という言葉に、ちょっとドキドキしながら藤本クリニック内にある仕事を訪ねてきました。

この日、会の皆さんと共に作業をするのは看護師の奥村さん。「作業時間はどれ位なんですか？」と奥村さんに質問すると「12時から16時までなんですよ。みんなからは、拷問だ～！」と言われるの。」と笑しながら答えが返ってきました。「森岡さんで～す」と紹介されて「どうぞ」と言われるままに、マジックテープからビニールを剥がし検品する作業が始まりました。7cmくらいの長さのマジックテープが板の上にキレイに並んでいます。私の横ではプラスティックの※細長いモノの長さを切り揃える作業も行われています。（※後で分かったことですが、この物体は猫じゃらしのジョイントでした）手際よく、手を休めることなく作業は進みます。そして時折交わされる会話は何気なく楽しい内容です。

### アラームの合図で休憩

50分の作業の後は10分の休憩タイムと決まっています。飲み物とお菓子で皆さんひと息入れるので。

「このお菓子って、ふふ～んふん♪（鼻歌）♪♪と違うかいな～？」と誰かが言うと、すかさず「それにつけてもおやつは○○やろ？」「今の鼻歌でよう分かったな～。○○おじさんやんな」「いやいや、これは違う！○○コーンや」と、奥村さんも参加して他愛無い会話が弾みます。黙って静かに座っている方もおられます、その姿は違和感なく溶け込んでいるという印象でした。

奥村さんの「えらい日焼けしてるやん？」という言葉から、庭の手入れをして日焼けした話になり、畠仕事のこと、

認知症は高齢者だけの病気ではありません。65歳未満で発症する認知症を若年認知症と言います。高齢者の認知症と病理学的に違いがあるわけではないと言われていますが、若年認知症は年齢が若いため、社会的、家庭的問題を多く抱えて、就労の問題など、多くの支援が必要とされています。

そんな中、退職直後の若年認知症の人々の働く場を求めて、守山市にある藤本クリニックで始まった取組みについてご紹介したいと思います。



著書のご紹介  
「ちょっと気晴らし伸び伸びの会」  
藤本クリニックの取り組みが掲載されています。  
福井県の取り組みが掲載されています。

中で、介護保険制度など、現在の公的介護サービスにはこのような場がないことを改めて確認することができました。

楽しい会話の中に時折、病気に触れる会話がありました。柿の木に実がならないところでは「ワシの頑みたいに、(柿の木も) pokeてんやろか(笑)」少し哀しく聞こえたのは私だけだったかもしれません。ここは病気のことを自然に話せる場所、安心して過ごせる場所、そして仕事をするという目的がある場所。

検品作業に自信がなく「難しいですね？」という私に「慣れたら誰でもできることやで。」と笑顔で話してくださいました。方、休憩の合図のあとも止まらなくなつて作業をする私の顔を覗き込んで「根を詰めたらアカンよ。休憩、休憩」と声をかけてくださいって、ほんのわずかなひと時でしたが、目的を持った集まりに仲間入りできたようで、ちょっと誇らしい気持ちの自分がそこにいました。部外者の私を自然に受け入れてくださった皆さんにお礼を申し上げたいと思います。「ありがとうございました。」

### 薬以外の治療（非薬物療法）

年齢にかかわらず、診断された直後の軽度認知症の人と家族を支えるには、薬以外の治療（非薬物療法）が必要だと藤本先生は仰っています。この日、作業の合間に、奥村さんと交わした短い会話の

若年認知症をはじめ認知症に関するご相談は  
守山市梅田町2-1 セルバ守山303 藤本クリニック内  
もの忘れサポートセンター・しが／滋賀県若年認知症コールセンター  
TEL:077-582-6032 携帯:090-7347-7853